

長崎方言におけるタイとバイの意味論的差違

前 田 昭 彦

キーワード：意味論、方言教育、文末詞、情報、共感

1 はじめに

我が国から関西弁以外の方言が消滅しようとしていると言われて久しい。ラジオが方言駆逐の先陣を切り、これに一時期の方言蔑視の学校教育が拍車を掛け、テレビの普及が方言征伐を完成させたというのが大方の認識であろう。事実、筆者と同じ町で生まれ育った小学校の生徒たちに、筆者が子供時代に使っていた方言語彙について尋ねてみると、ほとんどその意味を知らない。筆者と小学校の子供たちを隔てる40年余はまさにラジオの、そしてテレビの普及が始まり、完成した時代であった。

では、方言が消滅したかということ、必ずしもそうではない。たしかに死語となった方言語彙は多い。死屍累々の惨状といっても過言ではない。方言は姿を消そうとしているかのような印象を受ける。だが、日本語が相当流暢に話せる留学生にとって日本語の難解さの一つは方言だそうである。日本人学生同士が方言で話しているとき日本語が分からない、あるいはアルバイト先で地元の人のお話す方言が分からなくて困るという苦情をよく耳にする。方言は立派に生き残って外国人日本語学習者を悩ませているのである。

日本語教育において方言もまたこのように軽視できない存在である。本稿では方言と日本語教育の関わりに触れ、長崎方言において似たような文脈で使われながら微妙な違いをもつ助詞、「タイ」と「バイ」の意味論的差違について考察する。

2 日本語教育と方言

ここでいう日本語教育とは外国人日本語学習者のように日本語を母語としない学習者に対する日本語の教育であり、いわゆる国語教育とは異なるものであ

る。本稿において「日本語教育」という用語は総てそのような意味で使用する。

2-1 日本語教育における方言教育の位置

データは多少古くなるが、1995年に筆者が30名の外国人日本語学習者を対象にアンケート調査を行ったところ、90%にあたる27名が何らかの形で方言学習を希望していたり。調査対象は大学、大学院の外国人留学生と長崎県内に住む外国人英語教師で、1名だけ高校の留学生が混じっていた。日本語学習歴は半年から6年、レベルは初級後半から上級までの学習者であった。

方言学習を希望する主な理由は、日常耳にする方言を聞いて分かりたいというもので、方言を話したいからとするものは非常に少なかった。このことから、日本語を学習する外国の人々が日本語によるコミュニケーションの場でかなり方言にさらされていて、方言が意志疎通の障害になっていることが窺える。

筆者の調査に先立って関西、福岡、東北で行われた他の5つの調査では約62%から87%の学習者が方言学習を希望している²⁾。このように日本語学習者のなかには何らかの形で方言学習を希望する者が少なくないのであるが、実際に方言教育が実施されているかという点、そのような話はほとんど聞かない。教える側が方言に対する学習者のニーズに無頓着という面があるかもしれないが、仮にそのような需要に気づいたとしても、大学をはじめほとんどの日本語教育機関においては限られた時間に、いわゆる共通語を教えることで手いっぱいであり、方言教育にまでは手が回らないというのが実状であろう。

また、方言教育を実施するにしても他の問題がある。上記の調査や、筆者がこれまでに教室などで直接尋ねたところによると、学習者が希望する方言教育は方言の使い手になるためというのではなく、聞き手として方言を理解するためというものが多し。そこでは当然通常の日本語教育とは異なるカリキュラムが要求されるだろうが、問題は誰がそれを教えるかである。

発音や語彙使用の自然さの点からは学習目標となる方言のネイティブスピーカーが理想であろう。だが、全国各地の日本語教育機関で、方言のネイティブでかつ日本語教育の方法論が分かっている、しかも方言を文法的、分析的、体系的に教えられる人を教師として探すのは容易ではあるまい。長崎方

言のネイティブである筆者にしたところで、学習者のニーズに応じて長崎方言を本格的に教えるとなると相応の覚悟なしでは始められそうにないというのが偽らざる気持ちである。

2-2 日本語教育における方言教育の例

カリキュラムに基づく本格的な方言教育ではなく、いわば教室の中で自然発生的に始めた方言教育の経験が筆者にある。一部はすでにその一端を発表したものであるが³⁾、それも含めてここで簡単に報告しておくことにする。

2-2-1 文法的、体系的方言指導

1つは初級後半のクラスで学習者の要望に応じてかなり定期的、体系的に方言を教えたものである。筆者の担当時間が多かったこともあり、このクラスでは通常日本語教育の時間内に、週に2ないし3回、1回につき10分を上限として指導した。教え方としては、方言の中でも応用範囲が広く、使用頻度の高いものから取り上げていく、いわば文法シラバスに基づく積み上げ方式とでもいえる方法を採用した。

最初にイ形容詞と多くのナ形容詞の終止形、連体形は長崎方言では次のようにカとなることを教えた。長崎で生活し、地元の人々との接触がはじまると留学生がほとんどすぐにそれと気づくからであり、応用範囲も広いからである。以下、例文文頭の*の記号は非文ないし非常に不自然な文の意で使用する。

- 1) おいしい。 → おいしカ。
- 2) おいしい料理。 → おいしカ料理。
- 3) 機械は便利です。 → 機械は便利カ。
- 4) 便利な機械。 → 便利カ機械。
- 5) 好きな食べ物。 → *好きカ食べ物。
- 6) シャイ（／ナイーヴ）な人。 → *シャイ（／ナイーヴ）カ人。

次に下の7)、8)のように、格助詞ヲの位置にバが来ることを教えた。これも非常に使用頻度が高く、ほぼ例外がない。言うまでもないことであるが、学習者に対して、学校文法の「格助詞」といった文法用語を使って教えたわけではない。以下も同様に学校文法の用語は本稿の記述を簡潔にするためであり、教室でそれを使用したのではないことをお断りしておく。

7) 本ヲ読む。 → 本バ読む。

8) 家ヲ出る。 → 家バ出る。

これに対する学習者の理解が得られた時点で、前回の文法事項を組み込んだ「おもしろカ本バ読んだ。」のような例文をいくつか作って、それを学習者に共通語に直してもらい、専ら方言の受信者としての理解力を高めることを図った。

このような方法で、「犬ノおる（犬ガいる）。」「りんごノおいしか（りんごガおいしい）。」のように格助詞ガの位置にノが来やすいこと、格助詞のなかの橋本文法で言う準体助詞ノは、「青かトがよか（青いノがいい）。」「料理するトはおもしろか（料理するノはおもしろい）。」「いつ結婚するト（結婚するの）。」のように長崎方言ではトになること、「この、その、あの」や「なに」などは撥音便化して「こん、そん、あん」や「なん」となることなどを教えた。ここまで学習が進んだ後では、教師が以下のような長崎方言の疑問文を作り、それに共通語で答えてもらう練習を付け加えた。

9) そんな本はおもしろかと？（その本はおもしろいの？）

10) きのう、なんばしたと？（きのう、なにをしたの。）

11) そんなバッグ中になんのあると？（そのバッグの中に何があるの）

ここで、方言による質問に答えてもらうとき学習者に方言を使用させないようにしたのは、何よりも方言の共通語に対する干渉を警戒したからである。また、日本人の場合、当人は善意であれ、その土地の者でもないのに方言を下手に使うと、往々にして地元の人々の反感を買う惧れがあるという現実を考慮したからでもある。

この種の反感は、他所者がその地の方言をおもしろ半分を使い、方言使用者を蔑視していると考えことから生じるのであろう。この点、東京や関西の方言とその他の方言では事情が異なっている。東京弁、関西弁においては移住者がそれを使用するようになるのが当然とされているようである。日本の政治、文化の中心地として、常に他所者を受け入れてきた歴史をもつからであろう。日本人同士の場合と外国人の場合は多少の違いはあると考えられるが、方言使用にはその地の住民のアイデンティティの相互確認という意味合いもあるので、外国人留学生があえて方言を使用する必要はどこにもないと考えたわけである。

このクラスでの方言指導はおおむね好評で、受講者が興味をもって学習し

ているのが感じられた。成功した例といえるが、その理由は次のように分析される。

- ① 学習者が日常的に長崎方言、九州方言の使用者と接触していた。
- ② 学習した方言がテストの対象とならず、気軽に勉強できた。
- ③ 1回の学習時間が短く、1回に1文法事項だけの学習で、学習量としての負担が少なかった。
- ④ 日常よく耳にするようなものだけを扱い、細かいことを教えすぎなかったため、学習者には親しみやすかった。

2-2-2 随時的、付随的方言指導

前項の文法的、分析的、体系的な方言の教え方に対し、これは機会を捉えて随時、方言を教える方法である。筆者の担当時間が少ない中級、上級者のクラスで方言学習に対する学習者の要望があったとき、この方法を採用して、方言を不定期的に教えていった。

ここで言う随時的、付随的方言指導とは次のようなものである。例えば、教科書に「帰らぬ人」という表現があれば、「ぬ」は「ない」の意の古語の残存であり、長崎方言、九州方言では「nu」の「u」が落ちて、「帰らん（帰らない）」「行かん（行かない）」「せん（しない）」「食べん（食べない）」のような形で頻用されていることを教える。また、「～なければならぬ」という表現が出れば、長崎方言では「～んばならん」さらに、「～んば」となり、「話さんば（話さなければならぬ）」「勉強せんば（勉強しなければならぬ）」「日曜日はアルバイトに行かんば（日曜日はアルバイトに行かなければならぬ）」のように使用されているといったことを教える方法である。

この教え方も概ね好評で、説明のあとでその事項に関連する質問や、他の長崎方言に関する質問も少なからず出され、学習者の方言に対する関心の深さが窺われた。なかには面白がって自分でもこのような表現を口にする者もいた。学習者が方言に興味を持ち、しかも体系的に教えられるほどの時間のゆとりがない場合、これは有効な方言教育の方法と考えられる。

学習者からの要望がなくても、初級後半以上のクラスで筆者はこのような指導をときおり行っている。学習者の反応はほとんどいつもよく、これは方言に関する知識を増やすだけでなく、そのとき学習する共通語である日本語を印象深く覚えることにも役に立つようである。

2-2-3 分析的かつ詳細な方言指導

方言指導がいつも成功するわけではない。学習者の強い要望で長崎方言を教え、頓挫した経験もある。これは「日本語能力試験」の1級ないし2級取得者⁴⁾とそれと同等の日本語能力を有する学生を対象とした上級者のクラスでのことであった。学習者の方言学習に対する要望がこれまで以上に強く、しかもその学習者の日本語のレベルがほぼ揃って高いこともあり、また週に1回だけのクラスでもあったので、1回あたりの方言指導の時間を15分から20分と長くした。ここでは、2-2-1で述べた分析的、体系的方法を使用し、さらに詳細に長崎方言を教えていった。

頻度が高く、しかも比較的易しい項目の説明の間は学習者は興味深そうであったが、促音便（食べたのさ→食べたとさ→食べたっさ、赤い→赤か→あっか、など）、ウ音便（早く→はよう、難しくて→難しゅうして、赤くなる→あこうなる、など）の多用といった発音の説明あたりから雲行きがあやしくなっていた。

長崎方言が含まれる肥筑方言の代表的なアスペク標示としてよくとりあげられる進行相（ヨル）、既然相（トル）などの説明が終わったとき、学習者は音を上げ、方言指導の中止を申し込んできた。普通の日本語さえまだ十分ではないのに、方言の勉強は難しすぎて、日本語の学習全体が混乱しそうだというのである。もとより学習者の要望で始めたことであったので、即座に方言指導は取り止め、以後は方言について質問があるときに随時それを受けるといった形に変えた。

ちなみに、進行相、既然相というのは概略次のようなものである⁵⁾。

- 1) 今ケーキば食べヨルけん、ちょっと待ってとてくれ。（今ケーキを食べているから、ちょっと待っていてくれ。）
- 2) あっ、だいかおいがケーキば食べトル。（だれか俺のケーキをたべてしまっている。）

1) は現在進行中の動作を表現するのに使用される。過去形はヨッタ、否定形はヨラン、過去の否定形はヨランダッタ/ヨランヤッタ/ヨランカッタである。過去形ヨッタは次のように使われる。

- 3) 昨日友達の来たとき、ちょうどおいはケーキば食べヨッタと。（昨日友達が来たとき、ちょうど俺はケーキを食べていたんだ。）

ヨルは共通語のテイル同様、下記4)、5)のように、行為の反復やそこか

ら派生する状態を表わすのにも使用される。ただし、共通語において、「結果としての状態」の表現として、他動詞+テアル（例：窓が開けテアル。）に対比される「自動詞+テイル（例：窓が開いテイル。）」のほうはヨルで表わすことはできない。この場合、排他的にトルが使用され、「窓の開いトル。」のようになる。他動詞+テアルのほうは、「窓の開けテアル。」のように共通語と同じ表現を使用する。

4) 毎日、20分ばかり走りヨルよ。（毎日、20分ばかり走っているよ。）

5) あの人は今日本語教師ばしヨルと。（あの人は今日本語教師をしているの。）

また、さらにやや乱暴な口調、あるいは早口の場合、ヨルは促音便化して、ヨツとなる。これは下の6)のように文末においても生じる。

6) 今ケーキば食べヨツ。

2) の「ケーキば食べトル」におけるトルは生じた事態の結果に気づいたときに使用される。これも促音便化されてトツとなり、促音便が文末でも生じることはヨルの場合と同じである。過去形はトッタ、否定形はトラン、否定の過去形はトランダッタ／トランヤッタ／トランカッタである。既然の否定というのは言葉の妙な組み合わせになるが、これは次のようにその事態が生じると予想されていたことが生じていなかったことに気づいたときに使用される。

7) ケーキは食べられトラン。

8) 雨は降ットラン。）

7) はケーキが誰かに食べられていると思っていたが、そうではなかったときに、8) は雨がふったものと思っていたのにそうではないと分かったときに使用される。

ただし、1) の「食べヨル」はトルに置き換えて、「食べトル」としても意味は変わらない。すなわち、トルはヨルに代わって進行相も表わすことができるわけである。これに関しては工藤（1998）で「これは、一般アスペクト論的観点からみて、imperfective aspectとresultative(perfect) aspectとが一つの形式に統一されてしまうという点で、（管見の限り他言語からの報告・記述がなされていないと思われる）きわめて興味深い現象である。」と述べられている。

さらに、トルは上の4)「毎日、走りヨル」や5)「日本語教師ばしヨル」のような行為の反復やそこから派生する状態を表わすヨルにも代わることがで

き、「毎日、走っトル」「日本語教師ばしトル」となる。ここではヨルとトルの両者の間に意味の差違はない。

たしかに、「進行相と結果相が一つの形式に統一され」そうである。しかし、統一できない場合の存在にも留意しておく必要がある。前述のように、共通語の「窓が閉まっている。」が進行中の「閉まっているところ（／最中）」を表現するときは、長崎方言では「窓の閉まりヨル。」となり、閉まった結果としての状態を表現するのであれば、「窓の閉まっトル。」となる。両者は決して置換できず、ここでトルはヨルを代行できないのである。

このクラスではこれに類するかなり詳細な説明を行っていき、その挙げ句、方言指導は頓挫するにいたってしまった。筆者が前田・鹿島（1995）で述べた「方言指導は特別な場合を除きあくまでも補助的なものであり、微に入り細を穿つ教え方は慎むべきであろう。」という禁を自ら破り、その報いを受けたわけである。ここでいう特別な場合とは、日常的に専ら方言が使用される職場などに所属している学習者、あるいは方言研究者を対象とした日本語教育を念頭に置いている。

3 長崎方言におけるタイとバイ

3-1 タイ、バイとは

タイもバイも共通語の終助詞と同じように文末に使用されてある種の感情、気分、意図を表出する助詞である。通常は諸種の語の普通形に後接する。丁寧な表現ではない。丁寧体に後接して「ですタイ／バイ」「ます（と）タイ／バイ」「でした（と）タイ／バイ」「ました（と）バイ／タイ」のようにできるが、丁寧さの度合いは上がっても、敬意の表現にはならない。また、尊敬語につけて「貴方がおっしゃたですタイ／バイ。」などとできるがタイ／バイの使用で敬意はかなり下がってしまう。

タイとバイは一部に特異な文法規則に従うところがある。ともに名詞に後接するとき、普通形と丁寧形では次のように異なった規則に従っている。すなわち、普通形現在では「あれは船だタイ／バイ。」とは言えず、「あれは船タイ／バイ。」となる。一方、丁寧形現在は「あれは船ですタイ／バイ。」となる。過去形は「船だったタイ／バイ。」「船でしたタイ／バイ。」である。

ここに長崎のわらべ唄がある。

あつかとばい かなきんばい
 おらんださんから もろたとばい

「あつか」は「赤い」、「おらんださん」は「オランダさん」、「もろた」は「もらった」でウ音便化して「もろうた」さらに「もろた」となったものである。「かなきん」は入江一郎(1987)によると、ポルトガル語からの外来語で、その意味は次のように説明されている。「金巾(かなきん)は堅く撚(よ)った綿糸で目を細かく薄地に織った綿織物のこと。印度綿の一種で、江戸時代は「かなきん」のことを“長崎布”または“西洋布”といていた。」上の歌詞の中の文末詞バイは総て次のようにタイに置き換えができる。

あつかとタイ かなきんタイ
 おらんださんから もろたとタイ

このように置き換えても文法的には何も不都合が生じない。また、意味の上でも著しい相違はない。しかし、そこには何らかの意味の差違、表現したい気持ちの微妙な差違がある。そこで、その差違は何かと問われると、長崎方言のネイティブスピーカーが明確な説明に窮するのである。これは日本人が日本語を学習している外国人に助詞のハとガの意味の違いを質問されて返答に窮する場合に似ている。

タイとバイが文学作品に登場した例もある。遠藤周作著『沈黙』に以下のような表現がある。引用は新潮文庫版(1997年、27刷)により、タイとバイの箇所は筆者が片仮名表記に変えたものである。

98ページでタイは次のように使われている。

1) 「一人に? どこへ行きなさる。危なか。(中略) そこには教会もありません。パードレもおられますタイ」

さらに、148ページにもタイが出てくる。

2) その声をきくと信徒たちは嘲笑して、

「言いたか、ふんだい言いよっタイ。なんしが、ここに来たとか。ふうけもんが」

バイについては162ページに次のようなものがある。

3) 何も知らぬ番人は、人の善さそうに歯ぐきをみせて笑いながら、

「食べなっせ。奉行さまの御指図じゃ、こげん扱いは減多になかとバイ」

この作品の時代は1600年代中盤で、本稿の筆者は長崎方言の通時的知識にくらく、3世紀半も前の長崎方言についてはほとんど知識がない。しかし、この作品中の方言は現在のものと考えてよく、これを現在の長崎とその周辺の方言に照らして見ると、多少不自然に感じられる箇所もある。例えば、上に引用した番人の言葉の「食べなっせ」は熊本地方では使われていても長崎では聞かれない言い方である。長崎なら「食べまっせ」となる。この他にも「そげん、早う、歩かんでつかわさい。俺は体ん悪かけん」「どこに行きんさととですか。」(下線、筆者)など、現在、山陽地方で使用される表現や諫早、佐賀のそれが長崎や西彼半島、五島の現代の方言と混用されていてやや違和感を覚えるときもある。しかし、この作品中の方言の用法は全般に巧みで、長崎とその周辺の土着の人々の雰囲気が非常によく醸し出され、方言使用により作品に厚みが増しているような印象を受ける⁶⁾。

遠藤氏の小説『沈黙』から引用した上記1)、2)、3)のタイとバイは現代の長崎方言として正用法である。ここで、いずれのタイとバイを置き換えても、ニュアンスは変わるがさほど不自然な感じは生じない。だが、ここで置き換えたら変わってしまうニュアンスとはどのようなものであろうか。

筆者がタイとバイのこのような意味論的な差違に関心を抱くようになったのは、4、5年前の駅での出来事にさかのぼる。長崎駅の改札口で順番を待っていると、筆者の2、3人前の若い女性が長崎弁で博多行きの出発ホームを尋ねた。改札が終わり、彼女が数歩、異なる方向へ歩きかけたとき、駅員は声を大きくして「4番バイ」と言った。先ほどの説明に念を押したわけである。この状況でバイをタイに置き換えると不自然である。ここでの置き換えがなぜ不自然になるのか、それがタイとバイに興味を抱くようになったきっかけであった。

3-2 タイとバイに関する従来の記述

タイとバイに関して、入手できたものの中で比較的、あるいはかなり詳しく説明されたものを紹介してみよう。

神部宏泰(1991)は九州方言の統語的解説、「文法」において次のように説明している。

「アラー山バイ。」「アラー山タイ。」このようにおこなわれる文末詞「バ

イ」「タイ」は、主として肥筑地方におこなわれる。上述のとおり、共に体言にも直接して、指定助動詞に代わり得る程度の指定の効果を示している。しかし、両文末詞の機能に、微妙な差異の認められることは言うまでもない。「バイ」は話し手の心情・意図・判断の、一方的な訴えかけを基本とするのに対し、「タイ」は聞き手あるいは一般を認容した判断・意図の、客観的な措定を基本とする。つまり、「バイ」には、直接的な表出にかかわる、一種の自己主張性の認められるのに対して、「タイ」には、判断の普遍化を目ざした、一種の客観性が認められる。共に隆盛で、それぞれの異形も多い。

藤原与一（1997）の辞書ではタイとバイをそれぞれ見出し語に立てて説明し、多くの例文が添えられている。しかし、分布と出自に関する考察は詳しいが、意味の説明は粗略で、バイに関しては全くないと言ってもよい。それぞれ、解説の要点は以下のようなものである。

タイ **文末** 助詞トの内在が考えられる九州地方に特異な文末詞（主としては「そうだよ（ですよ）。」などの「<だ>よ（<です>よ）」気分をあらわしがちのもの）○九州では、肥筑地方にこれがよく行われている。

バイ **文末** 人称代名詞「わたし」系のワイの変化形。（中略）九州では肥筑地方が、バイのさかんにおこなわれる所である。鹿児島県下には、バイの分布が見られない。（中略）宮崎県下と大分県下とにも、バイ分布がごくよわい。

藤原（上掲書）では、タイの項に「九州方言下にいちじるしいバイは、「私」系のワイからの転化形に相違あるまい。タイもトワイからのものとするならば、等しく「私」系のものとされようか。である時、タイとバイとが、今の現実では、くっきりとした用法差を示すことになっているのが、一つ、興味ある、また考慮すべき問題とされる。」と述べられている。しかし、その用法差に関して意味の面からの説明はない。バイの項の豊富な収集例の共通語訳からみると、バイもタイと同じように「<だ>よ」などの気分で使用されるという捉え方であり、タイとの差は不明である。

坂口 至 (1998) には以下のような説明がある。

文末詞「バイ」

話し手の感情を直接に表す文末詞の代表として、「バイ」があげられる。用法としては、自己の判断の確認や、それを相手に穏やかに教示する場面が多い。

文末詞「タイ」

「バイ」とともに、頻用度の高い文末詞に「タイ」がある。客観性の強いことがら、自明のことがらを言明するときに用いられることが多い。したがって、「バイ」に比べて突き放した言い方になる場合が少なくない。

4 タイとバイの意味

タイとバイはほとんどの場合置き換えてもさほど大きな意味の違いが現れない。しかし、前述したように置き換えができない場合、あるいは、置き換えると不自然な場合がある。タイとバイはどのような意味で使用されているのであろうか。事例にあたってみることにしよう。

まず、藤原（前掲書）の収集例の中で長崎県に関係したものと、坂口（前掲書）に記載のある例文を検討してみよう。例文の後の共通語訳も藤原氏と坂口氏である。なお、前者に付してあるアクセント記号は割愛させて頂いた。タイのほうから引用して検討してみよう。

1) ヨカデスタイ。ヨソジャナカッケンナー。(＜ここへ泊っても＞

いいですよ。よそではないんだからね。老女→藤原。ここは、私が宿泊した宿屋さんの主人の母ごの家である。) (藤原)

上の例文でタイはバイに置き換え可能である。ただし、この状況でバイを使うと宿泊を許可する感じが出る。この文脈で使用されたタイには「いいじゃないですか」と宿泊を勧める感情が含まれているが、ここでバイを使用するとそのような親切心からの誘いの気持ちは感じられない。

2) センペタイ。ソレガヨカタイ。(せんべいだよ。それがいいよ。

中男。運転手さんが、そのほしいものを言うところである。) (藤原)

上の2)でも、タイはともにバイに置き換えができる。この文脈で「センペタイ」を「センペバイ」に換えると「間違えるんじゃないよ。買いたいの煎餅なんだよ。」と念を押す、きつい感じが出る。坂口（前掲書）でバイは

「相手に穏やかに教示する場合が多い」と解説された感情とは逆になる。後半の「ソレガヨカタイ」を「ソレガヨカバイ」にすると、自己の好み、選択を明瞭に打ち出した感じになり、「ソレガヨカタイ」のもつ「それがよさそうだ」を若干含んだ柔らかさが消えてしまう。

坂口（前掲書）の例文ではどうだろうか。

3) ソガンコタ センチャ ヨカタイ（そんなことはしなくてもいいさ）。

（坂口）

ここでは藤原（前掲書）の場合と異なり、文脈の記述がなく、どのような場面で、また、どのような口調で発話されたのか分からないので解釈が難しい。状況を設定して検討してみよう。

妻が夫の会社の上司にお歳暮をしようと言うのを聞いて、夫が次のように発話したとしよう。

妻：今度の新しか部長さんにお歳暮ば贈りましようかね。

夫：ソガンコタ センチャ ヨカタイ。前の部長にも贈らんやったとやもん。

出世しとうして、胡麻ばすりだしたと思われとうなかばい。

このときのタイは「そんな必要はないだろう。おまえもそう思わないか。そうじゃないかね。」と妻の同意を求める気持ちを含み、穏やかである。ここをバイに換えると、「そんな必要はないのだ」と一方的に命令した感じで、厳しく冷淡になる。ここでも、坂口氏の説明にある、タイは「突き放した言い方、冷淡な言い方」で、バイは「穏やかに教示する」とはならず、むしろ逆である。ただし、坂口氏が総てのタイ、バイがそうだと述べておられるわけではない。また、ここで強い口調でタイを発話すると、「どうしてそんなことが分からないのか」といった非難の意味が生じ、優しく、柔らかい口調でバイを発話すれば、バイには「しなくてもいいよ」といった穏やかさが含まれ、それぞれのニュアンスも変わってくる。

4) ワイガ シタケンタイ（お前がしたからなんだ）。 （坂口）

4) も状況を設定してみよう。二人をA、Bとしよう。AがBの嫌がることをして、BがAを蹴ったとしよう。きつとなったAにBが、「ワイガ シタケンタイ」と言ったとしたら、「原因はおまえにあるんだ。それがわからないか。」とでもいうふうに相手を強く非難した感じが出る。ここはバイに置き換えられないことはないが、バイでは弱々しく、非難の気持ちがほとんど表現されない。バイは穏やかにもなるのである。

この状況でバイを使うためには、第三者Cを登場させなければならない。Aを蹴ったBが「ワイガシタケンタイ」と言い、二人が一触即発の状態になったのを見て、とめ男のCがAに「喧嘩はやめろ。ワイガシタケンバイ。」と説得口調で言うのである。ここではバイが穏やかに説得しようというCの気持ちを伝えることができる。ここでCまでがタイを使えばCもAを強く非難することになり、Aとしては収まりの付きにくい気持ちになることだろう。勿論、口調によってニュアンスが異なることはいうまでもない。

次にバイの例文を引用し、検討してみよう。

5) サー、オレモ ソレ シラントバイ。(さあ、わたしもそれは知らないよ。
中男→中女) (藤原)

5) ではバイが普通であるが、タイも使えないわけではない。バイが単に「私も知らない」という情報を伝達しようとしているのに対し、ここでタイを使うと「あなたは私が知っていると思っていたかもしれないが、実は私も知らないのですよ。」の気持ちの表現になる。

6) アシター アメバイ (明日は雨になりそうだ)。 (坂口)

これは空模様などを見て発話されるものである。このバイは共通語訳よりやや確信の度合いが強く、「明日はきっと雨になる」という程度の気持ちである。独り言にも、他者に伝えるときにも使用できる。ここではバイが普通であるが、タイも使える。タイではそれを耳にする人にあなたも「そう思うでしょう」と多分に同意を求める気分が含まれる。あるいは、明日雨が降ったら不都合になる予定があって、「残念ながら明日は雨になりそうだ」という気持ちの表現にもなる。後者の場合独り言にも使用される。ここで、タイとバイの間に、「雨が降ること」に対する確信の度合いに差は感じられない。

7) オイガ スッケン ヨカバイ (俺がするからいいよ)。 (坂口)

7) の文は相手何かしようとしているとき、「自分がするから、あなたはしなくてもいいよ」と相手を制するために発話されるものである。このような文脈でタイは通常使用しない。

8) アータガ センババイ (貴方がしなければいけないよ)。 (坂口)

8) のバイは、「貴方がしなければいけない」という意見が発話者の主観として述べられたことを伝えている。ここでバイをタイに置き換えると、「周りの状況から見て、貴方がしなければならなかったよ」とでも言った気持ちの表現になる。その意味では、神部 (前掲書)、坂口 (前掲書) のタイ

は客観的という分析は正しいといえる。

5 タイとバイの本質的な差違

前章でタイとバイの意味合いの違いがかなり見えてきたが、本質的な差違はまだ明らかとはいえない。両者のニュアンスの違いを明確にする手がかりは、両者の置き換えができない文脈の中にあると考えられる。ここで、置き換えのできない例を検討しながら、両者の意味の本質的な違いを考察することにしよう。

まず、タイは使えるがバイは使えない、あるいはバイに置き換えると不自然になる場合を見てみよう。方言の分かりにくそうなところには下線を施して共通語訳をつけることにする。

- 1) A、Bを含む数人が外で一緒に飲み、Bのみ12時ごろ先に帰った日の翌日の会話。

A：きのうはまいったよ。家に着いたとは3時だったよ。

B：あれからまた何軒か回ったとタイ。

このように自分自身が持ち合わせていない情報を提示され、それを相手に確認したい場合、あるいはその情報から推測できることを相手に確認する場合はバイを使うことができない。次の2)、3)の例も同様である。

- 2) A：そんバスは駅には行かんよ。

B：えっ、駅には行かんとタイ。

- 3) A：部長の病気はどうもよくなからしかよ (よくならしいよ)。

B：元気のなかつて思うとったけど、やっぱり癌だったとタイ。

このように何らかの疑問形式になるとバイの使用は不可能となる。上の1)、2)、3)とも、「バイね」あるいは「バイな(あ)」であれば置き換えが可能である。一見、バイが確認や疑問に関与できそうに見えるが、それは実は終助詞「ね」、「な(あ)」の作用であり、バイの作用ではない。この形で使用されるバイは新しい情報を自分のものとして納得しようとしている心理を表現しているのであり、バイ自体が疑問の含意をもつわけではない。

さらに、次のように、知らされていた情報と異なることが分かったときもバイでは表現できず、タイが使用される。これは後に述べる「じゃないか」「じゃないの」と相手の同意を求めていると考えられるものである。

- 4) 病気と聞いていたBの元気そうな様子にふれて、
 A：元気かタイ。病気のだいお悪かって聞いとったばってん。
 B：うん、ちょっと風邪ひいとただけさ。大袈裟に言うもの
おっとやもんな（言うものがあるんだもんな）。
 5) テストは易しいと聞いていたが、受験してみると聞いていたことと
 違って難しかったとき、
 A：難しかタイ。

5) は独り言としても、「易しい」と言っていた友人にこぼす場合にも使用される。この場合、情報と違っていたという気持ちを表現する意図がなく、単に自己の感想を述べるだけなら、「難しかバイ」でもよい。

また、下に示すように、聞き手の同意や共感を求める場合も排他的にタイが使用される。共通語では「じゃない?」「じゃないの」「じゃないか」といった意味合いになる。

- 6) 今年の連休、あんたは7日も休みの続いて、よかばかりタイ（い
 ばかりじゃないの）。

以上のように情報の確認や聞き手の同意や共感を求めるときタイに換えてバイが使用できないことから、タイの本質は聞き手との情報の共有、あるいは共感への強い指向にあるといえよう。すなわち、聞き手が何らかの形でその情報を既に有していると想定されたとき、情報共有のマークとして、また、情報の確認のために、あるいはまた、発信する情報に共感、同意を求める気持ちを託して、発話者はタイを使用するのである。タイの本質は情報、感情の共有指向にあるといえる。

次にバイをタイに置き換えられない場合を見てみよう。

- 7) 会社から帰宅した夫が妻に、
 夫：課長になるって内示の出たバイ。
 妻：よかったね。おめでとう。今夜は家族でお祝いしましょうね。
 8) 自動車事故を目撃したAがその後、別の場所でBに会って、
 A：さっき、ひどか事故ば目の前で見たバイ。
 B：へえ、どんがん（どんな）事故だったと。
 9) 開店したばかりのレストランに行ったAがBに、
 A：今度新しうできたレストランに行ってきたばってん、料理は
あんまりうもうなかつた（うまくなかつた）バイ。

B：ふうん、そんなら行かんほうがよかね（行かないほうがいいね）。

このように聞き手が当然その情報を知らないと想定される文脈では、バイをタイに置き換えることはできない。ここからバイの本質は、話者による新情報の提供にあると考えられる。新情報というのはあくまでも話者の主観的な判断であり、聞き手にとってそれが実際に新情報か旧情報かの客観的事実とは無関係である。すなわち、話者が聞き手にとっての新情報と想定して情報を発信しているというのがバイに託された話者のメッセージである。この本質からバイの用法はさらに、話者の主観的な判断や意見、断定的意見の陳述へと広がっていく。

以上で見てきたように、タイには「そうだろう」「そう思うだろう」「そうじゃないの」と情報、感情の共有を求める気持ちが託されているが、バイにはそのような共感を求める気持ちはない。バイが説得に使われる場合があるが、それは発話者の述べる道理に従うことを求める一方的な言い聞かせである。

以上のことから、タイ、バイそれ自体には本質的に冷淡さや暖かみや穏やかさといった感情は付帯していないことが分かる。タイもバイも時には冷たく聞こえ、時には暖かく、また穏やかに聞こえたりするのはあくまでも文脈と口調によるものである。

タイとバイの本質を理解した上で、さらにいくつかの具体例に即して検証してみよう。

11) これはうまかタイ。

12) これはうまかバイ。

11) と12) が同じものを食べているAからBに言われたとすると、11) ではAはBに「おいしいじゃない?」「そう思わないか」というふうに通意、共感を求めているのである。それに対し、12) のAはBの思惑に無関係に自分の意見を述べているだけになる。

同じような状況で二人の間に次のような会話が交わされた場合はどうだろうか。

13) A：これはうまかバイ。

B：うん、うまかタイ。

14) A：これはうまかバイ。

B：うん、うまかバイ。

AのバイはBの思惑に関係なく、単なる自己の意見の陳述であることをマークするものであり、Bの同意、共感を求めているわけではない。これに対し、13) BのタイはAと同感であることを含んでいる。14) Bのバイは一見同感をマークしているように見えるが、同感文頭の「うん」が担っているものであり、バイは単なる自己の意見の主張、陳述にすぎない。

同じような状況で両者の意見が異なる場合はどうであろうか。

15) A：これはうまかバイ。

B：いや、うもうなかタイ。

16) A：これはうまかバイ。

B：いや、うもうなかバイ。

15) でBのタイは「どうしてそのようなことを言うのか、美味しくないじゃないの。」とか、「自分と同じように美味しくないとなぜ思わないのか。」と自己との同調、共感を求めていると解される。16) Bのバイは単なる自己の意見の主張であり、Aに同調を求めているわけではない。

タイとバイはこれまでの例と違って、一人納得する場合も使用される。

17) こうだったとタイ (ね)。

18) こうだったとバイ (ね)。

この場合、タイは情報源との共感を伴った納得になり、バイは共感という感情とは無関係で、新情報に対するまさに自己自身の納得である。

共通語の終助詞の多くが、ある種の感情を担って話の継ぎ手としての間投(助)詞に変わるのと同じように、タイとバイも間投詞としての役割を果たすときがある。

19) きのうね、デパートに買い物に行くとタイ、そしたら、偶然、昔の彼に会ったとタイ、そして、彼にコーヒーに誘われたとタイ…

20) きのうね、デパートに行ってバイ、偶然、昔の彼に会ってバイ、そしたら、コーヒーに誘われてバイ…

煩雑に過ぎるまでにタイとバイを使って例文を作ってみたが、このようにタイとバイは間投詞としても使用される。このときタイは聞き手の共感を呼びたいという心理で使用され、バイ使用には新しい情報を次々に提供することで聞き手の関心を引き付けたいという心理が働くものと考えられる。19)では情報としては初出で、通常ならバイが使用されるであろうが、ここでは発話者の心理の重心が情報の新旧より、タイによる共感の希求へと移行したと考え

られる。

タイもバイも様々な用法をもつが、本質はどのような用法においても同じであるといえる。すなわち、タイは話者が聞き手との情報共有を想定することを基本として使用され、確認、共感を指向する心理を表現するものであり、バイは話者が聞き手にとって初出の情報であると想定することを基本として使用され、新情報の提出という意識から必然的に派生する主張、さらに断言の心理の表現となり、さらに、自己自身への新情報としての納得ともなる。

6 おわりに

昨年、筆者は長崎県立女子短期大学の最後の年に、たまたま縁あって英文科の学生を対象にした「日本語学概論」を担当することとなった。そのなかの日本語の位相の項で方言にも触れ、受講生に方言についてレポートを書いてもらった。テーマは「タイとバイの違い」であった。

受講生18名中、鹿児島、宮崎の出身者はタイもバイも使わないということだった⁷⁾。また、福岡県の一部では「タイ」は使用しないという学生もいたので、タイとバイの比較ができない場合は方言について他のテーマでレポートを書くように指示した。その結果、タイとバイの違いについては15名の学生がレポートをまとめて提出した。

このようなテーマでレポートの提出を求めたのは、それが筆者の関心事だったからではあるが、一つには答えの分からない問題を自分の頭で考えて答えを探す訓練をしてほしかったからでもある。考察するにも方法論が分からなければせっかくの努力が徒労に終わることもあるので、できるだけ多くの例文を集めること、その中でタイとバイの互換性のない場合を手がかりとして考えることの2つをヒントとして出した。

提出されたレポートには優れたものが多かった。なかには鋭い分析に感心させられるものも数点あった。この若きタイ、バイのネイティブスピーカーたちのかなり多くが、タイに共感、同意、確認といった作用を認め、バイに主張、断言の作用を認めていた。これは筆者の語感に近似するもので、筆者の分析が一人よがりのものではないことを裏付けてくれるものと言える。本稿が真摯に課題に取り組み、興味深いレポートを提出してくれた学生諸君への一つの解答例としての役割も果たせれば幸いである。

注

- 1) 前田・鹿島 (1995) 「日本語教育における方言指導」に発表したもの。
- 2) 上掲「日本語教育における方言指導」に表化して示したが、あらためて出典を明示すると以下のとおりである。『月刊日本語 8月号』(1988)による調査、ならびに、『方言と日本語教育』国立国語研究所(1993)に発表された佐治圭三(1988)、川辺・滝尻(1991)、備前 徹(1991)、大塚 徹(1992)の各調査結果による。
- 3) 上掲注¹⁾の前田・鹿島(1995)にごくかいつまんで発表した。
- 4) 日本語能力試験1級のテスト結果は留学生の大学受験に利用されているが、ここ数年、受験者から1級のテスト会場では臨席の受験生の答案を覗く形のカンニングがかなりおおっぴらに行われていると聞いている。公的な能力試験を標榜する以上、テストの公正を期するという観点からも、公正な社会の構築という観点からも、制度全体としてカンニング防止の対策に一考を要するのではあるまいか。1級合格者でありながら、偶然という幸運が高得点をもたらしたとは考えられない程度まで日本語の理解力、運用能力に欠ける学生に遭遇した経験が筆者にもある。また、能力試験の受験準備をしている学習者の中にはカンニングを恥ずべき行為だと考えていないような者が見受けられることもある。筆者が方言指導を試みたこのクラスの学習者はそのようなまがい物の資格所有者ではなく、非常に高い日本語能力を有する学生たちであった。
- 5) 方言学関係の本では進行態、已然態として表記されていることが多い。ヨル、トルはアスペクトに関わるものであるから、進行相、已然相の表記を用いた。工藤(1998)では進行相、結果相と表記されている。
- 6) 遠藤氏の『沈黙』がいわゆる「歴史そのまま」を目指した歴史小説ではないことは作者自身認めているところであり、また、引用した新潮文庫の解説で佐伯彰一氏も指摘するところである。他にも日本キリスト教史をひもとけば、主人公つきの通辞がイエズス会二代目日本布教長カブラルとおほしき人物に接触したという記述も年代としては無理がある。『沈黙』は神の存在を問い、人間の魂を問うことをテーマとした小説であり、史実はその舞台装置としての役割しか担わされていないことは明らかである。そこでは、方言もまた舞台装置の一つとして使用されているのであり、当時の長崎および長崎周辺の方言の学術的再現と考えるべきでないことは自明である。
- 7) これは、例えば、『九州方言の基礎的研究 改訂版』(九州方言学会編集、風間書房、1991)の方言分布地図(p.173)の情報と一致している。しかし、長崎県島原

出身者2名がレポートのなかでバイはほとんど使わないと報告していたのはやや意外であった。

参考文献

- 入江一郎 (1987) 『長崎舶来言葉』長崎文献社
- 遠藤周作 (1981) 『沈黙』新潮文庫、新潮社
- 神部宏泰 (1991) 「文法」『九州方言の基礎的研究 改訂版』九州方言学会 編集、風間書房
- 工藤真由美 (1998) 「西日本諸方言と一般アスペクト論」『月刊言語』7月号、大修館書店
- 坂口 至 (1998) 『長崎県のことば』平山輝男他編集、明治書院
- 藤原与一 (1997) 『日本語方言辞書 一昭和・平成の生活語一』東京堂出版
- 前田昭彦・鹿島英一 (1995) 「日本語教育における方言指導」『THE LANGUAGE TEACHER』全国語学教育学会

(留学生センター非常勤講師)